

るのである。階級の言説が一九世紀のイギリス社会に与えた影響力の大きさを考慮してみても、この著者の主張は真摯に受け止められるべきであらう。

以上本書の内容を概観してきたが、著者が主張する政治文化に着目した研究は、近年イギリスのみならず日本でも研究が進んでいる。ただ本書はイギリス近代史における「修正主義」の成果を包括的に整理し、更にはそこに潜む問題を提起したという点で非常に大きな意義を持っている。

なお訳者の松塚俊三氏は一九世紀のイギリス社会における急進主義や民衆教育・民衆宗教を分析した論考を多数著わしている。著者と専門領域が極めて近く、そのため非常に丹念な訳出がなされている事に加えて、的確な訳者解題が付されているので、近代イギリス史の専門研究者のみならず、初学者にとっても非常に有益な一冊であると言えるだろう。

(A5版 二四四頁 二〇〇四年十月)

昭和堂 税別二四〇〇円

(藤井翔太 京都大学大学院文学研究科修士課程)

染田秀藤・篠原愛人監修

〔大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会訳〕

『ラテンアメリカの歴史』

——史料から読み解く植民地時代——

一九八〇年の日本ラテンアメリカ学会創設以来、日本においても、ラテンアメリカという地域が北アメリカから切り離された独自の研究領域として認識されるようになった。近年では、考古学、文化人類学、政治学、経済学など様々なアプローチから、ラテンアメリカについての豊かな研究成果がもたらされている。しかし、このような状況の中でも、ラテンアメリカ「史」研究はいまだ立ち遅れており、史料と向き合った本格的な歴史研究の事例は、多くはない。ラテンアメリカ史は、西洋史の一分野に位置付けられながらも、ヨーロッパを土壤として培われてきた歴史概念では読み解くことのできない、独特の歴史環境を有しているからである。

こうした現状を打開し「ラテンアメリカ史研究の裾野」を広げるためには、日本に

おいても容易に史料を利用できるようにする必要があろう。この思いを持って、これまでラテンアメリカ史研究をリードしてきた染田秀藤氏、篠原愛人氏らは大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会を発足させた。本書は、そのメンバーによって訳出、編纂された、本邦初のラテンアメリカ史料集である。

本書は、時代順に並べられた全三章から成る。また、第二、第三章では、各々五および七の節が立てられている。以下、本書の構成に即しその内容を紹介したい。

第一章「先スペイン期」では、先住民が自らの過去について、スペイン人到来以後に記した土着史料が所収されている。この章は、他の章に比べると紙幅が割かれていない。しかし、それらの史料からは、ヨーロッパ人側の記録文書のみには依拠してきた従来の研究が明らかにしてこなかった先住民の精神世界、歴史観を読み解くことができる。

第二章「発見・征服時代」では、条約や王令、報告書などが所収されている。その中にはベタンソス「インカ史総説」を始めとして、その重要性が指摘されているながら

も邦訳されてこなかった記録文書も多く紹介される。これらの史料からは、政策や制度、征服過程が明らかとなり、また、征服に対して先住民はいかなる態度をとったのか、スペイン人はどのように他者を認識したのかをも読みとることができる。特に、第V節「インディアス論争」では、日本においても研究が盛んなテーマであるインディアス論争に関する諸史料が紹介され、史料レベルからこの論争を概観することができる。

第三章「植民地時代」では、統治機関、教会、スペイン人社会、非白人社会、経済活動、ブルボン改革といったテーマのもと、様々な性格の史料が収められている。統治機関に関する諸節（第I節「スペインに設置された統治機関」、第II節「インディアスに設置された統治機関」）では、これまでの概説書からは曖昧なイメージしか掴めなかった中央機関、さらには先住民の市参事会や先住民専用法廷などの規定内容を、具体的に知ることができる。第IV節「スペイン人社会」では、勅令、訓令などの文書史料だけではなく、遺言書や私信、スペイン人以外のヨーロッパ人による旅行記など

プライベートな史料も収められており、当時の社会を生きていた人々の生の声を聞くことができる。特筆すべきは、第V節「非白人社会」であろう。この節では第三章の中でもっとも多くの史料が紹介されているのだが、このことは、近年の研究がスペイン人以外の社会にも目を向け、総合的に植民地社会を把握しようとする傾向にあることを示しているといえる。

以上、概略的ではあるが本書の内容を紹介してきた。本書は何よりも、日本における初めてのラテンアメリカ史料集であるという点を評価すべきであろう。確かに、そこには一定の限定が付されていることも否めない。編者自身も指摘しているように、対象地域はスペイン領アメリカ（特にメキシコとペルー）に限定され、ラテンアメリカの大国の一つであるブラジルは含まれていない。また時代的にも、一六世紀に関する史料が中心となっている。本書では重点が置かれなかった一八世紀後半（第三章第VII節「ブルボン改革から独立へ」）で、若干の史料が紹介されている（）には、ラテンアメリカは世界システムに組み込まれるという大きな転換期を迎えることを考慮すると、

今後はこの時代までを視野に入れた史料集が望まれる。

しかし、本書は、法令などの基本的史料を中心としながら、土着史料や地方文書など近年の研究では不可欠な史料を随所で紹介するなど、野心的な試みがみられる。また、節ごとに柴田、篠原両氏による簡潔な総説が付されており、優れた概説書としても役に立つ。本書はスペイン領アメリカの植民地時代に関心を持つ者にとって基本文献となるだけではなく、歴史学に関わらずラテンアメリカを研究対象とするすべての者にとって、有益な書となるであろう。

（四六版 三一五頁 二〇〇五年五月）

世界思想社 税別二四〇〇円）

（山下裕子 京都大学大学院文学研究科修士課程）